

ハエ類幼虫多数が出荷豚消化管から検出された事例

浅川 満彦

酪農学園大学 獣医学群 獣医学類 医動物学ユニット
(野生動物医学センター)

はじめに

出荷されたブタから多数の蠕虫様物体が検出されたため、当方にその鑑定が依頼された。結局、ハエ類幼虫(蛆虫)と判明したが、本誌でも類似した事例を紹介したように¹⁾、このような例と対峙した関

係者の苦悩は深い。加えて参照できうる報告がほぼ無いので、ますます彼らの不安は募ることになる。そのような悪循環解消の一助として、今回、記録を残すことにした。

依頼の経緯

2022年1月下旬、北日本の某養豚場から出荷された180日齢のブタ1個体のト体検査をした獣医師が、切開した胃から小・大腸より内容物に混じり蠕虫様の物体が多数検出された(図1)。そこで、この獣医師はこの消化管を含め内臓を全廃棄するように命じた。その後も、同様な事例が続き、当該獣医師が、谷口ら¹⁾の事例を知り得たことから、同年2月初旬、当方に物体の鑑定依頼がなされた。

当方への依頼時のメールには、件の蠕虫様物体の写真(図1)が添付されていたので、この物体の保存状況を確認したところ、既に廃棄済との回答を得た。そこで、依頼をしてきた担当獣医師には、次回、同様な事例を経験したら、必ず当該物体と消化管を保存し、同時に当該個体を出荷した養豚場の現地調査を依頼した。写

真画像だけでは困難ではあったが、外観がハエ類の幼虫(すなわち蛆虫)に類似し、かつ、真の寄生性蠕虫類としては胃から小・大腸を寄生部位とするのは違和感があったので、幼虫の経口的な摂取を想像したからである。



図1.北日本某養豚場から出荷されたブタ胃から小・大腸にて検出された蠕虫様物体(検査をされた獣医師が撮影)

結果と考察



図2. 同養豚場出荷ブタ2個体の大腸から検出されたイェバエ類(左;背景のメッシュの1辺5 mm)の幼虫(中央)と成虫(右)
なお、送付時に乾燥状態であったものを70%エタノールで固定、その後、撮影

依頼があった問題の個体が見つかった3日後、同養豚場から同日齢で出荷されたブタ2個体から前回同様の物体が検出されたので、それらがやや乾燥した状態で当方に送付された。しかし、残念ながらその物体が見つかった消化管は、手違いで既に廃棄されてしまったので、その代わりに、同ブタ群からランダムに選ばれた3個体分の切開直後の内容物を含んだ状態の大腸が参考材料として送付された。

その物体の形態学的な検討の結果、高度に変性したハエ類成虫と幼虫であった。成虫の前胸背側の特徴的縞模様の本数は確認出来なかったが、体長約6~8 mmであったことから、イェバエ類(特に、イェバエ)であると目された。これは本事案発生時期、すなわちイェバエ類が成虫で越冬する点も矛盾しない(ニクバエ類は蛹で越冬)(以上、図2)。一方、参考材料を肉眼で検査した結果、そのような幼虫は未検出であった。

著者からの報告を受け、当該獣医師は当該養豚場を踏査したところ、餌槽に死体を含むハエ類成虫を認めた(図3)、幼虫は未確認であったという。おそらく、



図3. 当該養豚場の餌槽に散在するイェバエ類成虫(黒点状のもの;検査をされた獣医師が撮影)

成虫はこのような状況で偶発的に餌とともにブタに経口的に摂取されたものと考えられた。そして、消化の途上にあつたので、変性をしたものがト殺時に検出され、今回の事例となったのであろう。

訂正とお詫び(NJK2019年7月号「特別寄稿」)

虫卵を扱った谷口ら¹⁾の末尾で、クロバエ類・ニクバエ類のハエウジ症について付記したが、その文頭で「今回のような」という文言は明らかに不要で、混乱を招くものであった。これらハエ類は卵胎生であるからである。この機に謹んで訂正し、お詫びをする。

【引用文献】

1) 谷口 萌・齋藤明子・浅川満彦. 2019. 飼育猛禽用の餌として購入されたウズラ皮下にハエ類虫卵が認められた事例. NJK Jul 2019: 28-29.